師・金子兜太　（三）

松本勇二

れんぎょうに巨鯨の影の月日かな　　『皆之』

冬眠の蝮のほかは寝息なし　　『〃』

「海程」終刊時の特集「忘れ得ぬ一句」で取り上げました。感覚でつないだ壮大な二物配合の句であります。子育て真っ盛りの時期に頂いた色紙が当該句であり「俳句も仕事も子育ても大きく大きく」と励まされた感慨深い一句です。二句目は「いきもの感覚」を唱えられ始めた頃の作品で、蝮の寝息にまで感応しています。「人間も生きもの。あらゆる生きものに情（こころ）を向けよ」と教えられました。

酒止めようかどの本能と遊ぼうか　　『両神』

二階（愚陀仏庵）に漱石 一階に子規秋の蜂　　『〃』

長生きの朧のなかの目玉かな　　『〃』

「即興ということについて大いに得るところがあった。即興の句には対象との生きた交感がある。」とあとがきにあります。酒止めようかの句は、七十代後半を迎えての昂揚感の発露ではと思っています。二句目は、愚陀仏庵を尋ねた時の即吟です。「秋の蜂」との「生きた交感」がこの句を高めています。三句目は当該句集の最高傑作と思います。目玉に焦点を当てつつ生きている自己を凝視しています。老練に加え柔軟性を増してくる兜太でありました。

よく眠る夢の枯野が青むまで　　『東国抄』

じつによく泣く赤ん坊さくら五分　　『〃』

有馬記念という一団の馬たち　　『〃』

芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を彷彿とさせる一句目は、先の「おおかみに蛍」の句とともに兜太絶唱句と思っています。大会でも朝はとてつもなくゆっくりされて会場に姿を現しました。筆者は「枯野が青むまで」眠っておら

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

れたんだなと独りごちておりました。二句目は八木健会長司会の俳句番組に出るための松山行き機内での出来事です。空港にお迎えした時「ずっと赤ん坊が泣いていた」と話されていました。見事な即吟です。三句目は即吟に映像性が加わった句で、この大きな把握こそ兜太最大の能力ではと思っております。あとがきに「とにかく、わたしはまだ過程にある。」と書く、八十二歳当時の兜太でありました。

長寿の母うんこのようにわれを産みぬ　　『日常』

いのちと言えば若き雄鹿のふぐり楽し　　『〃』

生前に出された最後の句集です。「アニミズムということを本気で思っている」とあとがきにあります。九十歳の句集にある句とは思えませんがこれが兜太です。兜太には、ふぐり、陰、肛門、摩羅、童貞、など猥雑な語を使った句は多数ありますが、ここまで取り上げずにきました。このような句を井口時男氏は先の書籍で「知性を介さぬ『非知』のおかしさ（滑稽）である。」と書き、兜太の行き着いた所とも書いておられます。筆者も首肯しています。

河より掛け声さすらいの終るその日　　『百年』

陽の柔わら歩ききれない遠い家　　『〃』

兜太一周忌に出された句集です。掲句は亡くなる二週間ほど前に書かれた九句のうちの最後の二句です。終焉を予見しているような句で凄味があります。

前衛からアニミズムまで思うままに自由に書き続けられた師・金子兜太でありました。

（了）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。